

# 結晶化するイメージ

—アーサー・シモンズ “Hallucination: I”

庄子ひとみ

はじめに

本稿の目的は、Arthur Symons (1865–1945) による詩 “Hallucination: I”<sup>1</sup> を手がかりに、シモンズの詩人としての斬新な挑戦と先見性について再評価を試みるものである。文芸批評集 *The Symbolist Movement in Literature* (1899; 2<sup>nd</sup> ed. 1919) の著者として、世紀末からモダニズムへと移行する文学上の橋渡し役を担った彼の貢献は広く認知されている。しかし一方で、詩人としての評価はヴィクトリア朝世紀末におけるデカダンスの代表的詩人という印象が強いままではないだろうか。“Hallucination: I” は、世紀末の都市の雰囲気を与えつつ、象徴主義的なイメージを用い、モダニズム文学における「意識の流れ」を彷彿とさせる手法に挑戦していた例として興味深い。シモンズ＝デカダントの印象を強めてしまった詩集 *London Nights* (1895; 2<sup>nd</sup> ed. 1897) 出版の背景を確認した上で、“Hallucination: I” に採用されている手法に注目し、彼の後進世代、モダニズムを担った作家達とどのような類似性が認められるのかを中心に考察する。

## 1. 世紀末都市のムードを伝える詩人

“Hallucination: I” が収録されている *London Nights* はシモンズにデカダント詩人のイメージを強く印象づけることになった代表的詩集だろう。その出版の二年前、1893年11月には *Harper's New Monthly Magazine* に “The Decadent Movement in Literature” を寄稿し、デカダンスを「新しくて美し

い、興味深い病<sup>2</sup>と書いている。(867) 見知らぬ人々が忙しくすれ違う都市で、その群衆の中に自ら飛び込み、ときに留まり、交わる悦びと倦怠。Charles Baudelaireの美学をロンドンで実践した<sup>3</sup>と自負するシモンズらしく、ガス灯がともる頃を好んで街を彷徨い、ミュージック・ホールの踊り子や娼婦を彷彿とさせる不特定多数との逢瀬の体験をも積極的に主題として扱ったその本は、ロンドンの夜の顔、退廃的な世紀末の雰囲気満ちていた。初版が出版された1895年5月とはOscar Wildeの有罪が確定した時期でもある。その余波で世間一般のデカダントとよばれる人物への拒否反応が激しくなった時期<sup>4</sup>でもあり、その影響をまともに受けた媒体のひとつが雑誌*The Yellow Book*であった。シモンズが同誌に寄稿した複数の作品の中でも、後に*London Nights*に収録された“Stella Maris”は、詩人と行きずりの女性との情事を想起させる一方で、カトリック教会では聖母とみなされるStella Marisの名前をタイトルに採用する大胆さで、1894年4月号に掲載されるや否や、保守的な読者や批評家から非難された。詩中に一言も“prostitute”という言葉が使用されていないにもかかわらず、読者にそう確信させた理由のひとつは、シモンズの詩に添えられたAubrey Beardsleyの挿絵(Fig. 1)「これ見よがしに露出の多い衣装を着用している女性」(Ledger 11)による部分が大きいだろう。漆黒の夜の街を一人歩く黒いドレスの女性。黒く塗りつぶした背景に黒い前景を重ねるというビアズリーの大膽な企みは、暗闇に紛れて全ての輪郭が不明瞭な路地裏に迷い込んだかのような感覚を喚起する。黒インクの「夜」の中に浮かび上がるのは、彼女の首から胸元にかけてのデコルテ・ライン、露になった肌の白さである。そのコントラストは読者の眼に一層強調され、彼女が詩人の出会った「まるで吸血鬼のように男性の首筋に唇を重ねる、シモンズの夜のジュリエット」(Ledger 10)ではないかという印象を抱かせる。シモンズの詩とビアズリーの挿絵は、お互いが示唆に留めている部分を補完し説明し合うかのような、相互テクストの関係性を保ちながらも、読者の眼にボヘミアン詩人の都市経験の一場面を鮮やかに提示する。(Turner 142-143) そし



Fig. 1. Beardsley, Aubrey. "Night Piece." *The Yellow Book*. Vol. I, April 1894: 127.

て、一度形成されたイメージは、雑誌という大量印刷物に掲載されることによって広く大衆に浸透してしまう。

このような状況下で *London Nights* が出版されたが、書評の多くは辛辣で、中にはシモンズ自身的人格否定ともとれるような辛辣なものもあった。「アーサー・シモンズ氏は穢れた精神の持ち主であり、その精神は出来の悪い詩のよせあつめに反映されている。」(“Pah!” *Pall Mall Gazette*, 2 September 1895) シモンズが *London Nights* 第二版で追加した序文は、批判への反論としてだけでなく、彼が目指した詩学を確認できる声明として注目に値する。

このような批判がよせられるのは予想していたことでもありましたし、覚悟はしていたつもりです。(中略) 道徳性の問題が理由で私を攻撃してきた人々は、それゆえ私の本も否定したのです。芸術として劣っているからではなく、不道徳な内容だと考えたから。彼らは自分たちが芸術的判断と道徳的判断を混同していること、そしてそのように芸術を制限したところで道徳を助けられはしないということを忘れてしまっているでしょう。(中略) 芸術が道徳に奉仕されることはあるでしょう。しかし道徳の為に芸術が仕えるようなことがあってはなりません。(Collected 165-166)

シモンズはさらに「この本に書かれている内容がすべて現実に起きたことの記録などと断言するつもりはありません」(167) と記し、「収録されているすべての詩は、かつて私のものだった特別なムード、その瞬間、まるで世界はそのムード以外何も存在していなかったかのような、そんなムードを表現しようという真摯な試みであるのです」と説明する。「たとえそれが海の小波にすぎないほど些細で、その波がうちよせる程に東の間の出来事であったとしても詩で表現する権利が私にはあるのです。」(166) この声明にはシモンズが *London Nights* を献辞している Paul Verlaine の詩学「我々は尚、ニュアンスを求め。色彩ではない、ただニュアンスを！」(*Art Poétique*, 1874) への共感<sup>5</sup> が認められよう。シモンズが“mood”という言

葉を多用しているように、*London Nights* に収録されているシモンズの詩は、夜の散歩で出会った些細な出来事、ミュージック・ホールの明滅するライトに揺れる踊り子のステップ、あるいは眠れぬ夜の焦燥感のなかでみる夢現のイメージ等、自身が日々経験している都市生活の流動性の中にあつて、常に目前を通り過ぎてしまう些細な瞬間を心象風景として切り取り、描写する試みなのだ。彼の詩の特徴を挙げる際に“impressionistic”<sup>6</sup>という言葉が頻繁に用いられる理由も、このような特徴ゆえのことであろう。

## 2. 象徴主義のイメージ、モダニズムの手法

“Hallucination: I は、詩集の頁をめくるといふ些細な瞬間からはじまり、魅力的で残酷なファム・ファタールの存在を示唆しながら、ポードレールの美学の実践者を自負するシモンズの私生活を彷彿とさせる。*London Nights* に一貫して満ちている世紀末の雰囲気演出するに相応しい、この本に収録されるべき詩であることは事実であろう。

Hallucination: I

One petal of a blood-red tulip pressed  
 Between the pages of a Baudelaire:  
 No more; and I was suddenly aware  
 Of the white fragrant apple of a breast  
 On which my lips were pastured; and I knew  
 That dreaming I remembered an old dream,  
 Sweeter than any fruit that fruit did seem,  
 Which, as my hungry teeth devoured it, grew  
 Ever again, and tantalized my taste.  
 So, vainly hungering, I seemed to see  
 Eve and the serpent and the apple-tree,  
 And Adam in the garden, and God laying waste  
 Innocent Eden, because man's desire,  
 Godlike before, now for a woman's sake

Descended through the woman to the snake.  
 Then as my mouth grew parched, stung as with fire  
 By that white fragrant apple, once so fair,  
 That seemed to shrink and spire into a flame,  
 I cried, and wakened, crying on your name:  
 One blood-red petal stained the Baudelaire. (*Collected* 211)

幻影：I

ボードレールのページをめくると  
 血のように赤いチューリップの花弁がひとつ  
 それだけのこと；そして私は突然思い出す  
 かつて私の唇が彷徨った  
 芳しい白い林檎のような乳房；そうあれは  
 昔の夢を思い出す夢を見ていたのだった  
 どんな果物よりも甘美にみえたその果実は  
 飢えた歯が貪りつこうとも 再び大きくふくらんで  
 味わえなくて焦らされるばかり。  
 虚しくしがみつきながら おそらく私がみていたのは  
 庭園にいるイブと蛇と林檎の樹  
 そしてアダム 神は無垢なエデンを荒廃させたまま  
 なぜなら男の欲望は  
 かつて神と同様のものだったのに いまや一人の女のためにあって  
 その女を通して蛇へと堕ちてしまった。  
 口が乾き 火傷のように激しく痛んだのは  
 かつてあんなにも美しく 芳しかった白い林檎が  
 細く旋回し燃えあがる焰となってしまったから  
 私は泣きながら目を覚まし 君の名を叫んだ  
 ボードレールのページの上に 血のように赤い花弁の染み。

詩人シモンズの意識は、詩集の間に挟まっていた赤い花びらに気づいた途端に、現実と昔見た夢、あるいは過去の記憶が不規則に混じり合った、奇怪な「幻覚」の連続の渦へと取り込まれる。それらの絶え間ない生成が展

開される直前に挿入された「昔の夢を思い出している」という言葉は、恐ろしいことがありそうな予兆に満ちている夢の中であって自らに「これは夢だ」と説得する人の、怯えた心持ちを表しているようでもある。女性の乳房の象徴として現われる甘美な果実、その乳房の持ち主のモデルとなっているのは詩人の母なのか、あるいは恋人であるのか。シモンズ自身はこの疑問に明確に答えてはくれないが、おそらくはシモンズが生涯敬愛した母 Lydia<sup>7</sup>であり、シモンズが *London Nights* の出版直前に親しく交際し、美貌と気まぐれでシモンズを魅了した後に残酷にも彼の元を去った、若いミュージック・ホールの踊り子 Lydia<sup>8</sup>であろう。「ふたりの名前が同じことで、エディプス幻想の目覚めの対象としての母と、現実に官能的な喜びを与えてくれる恋人とが曖昧に混じり合い連結されてしまう、それが結果としてどのような心理的ダメージをもたらすのかは推測の域を出ないが、シモンズが精神疾患を発症した後に抱えつづけた罪の意識につながったのではないだろうか」とベックソンは分析している (Beckson AS 102)。

たしかに“Hallucination: I”で描かれる乳房の表象は、奇怪な幻覚<sup>9</sup>と形容できる種類のものだろう。かつては温かな母性の象徴として、あるいは恋の官能の甘美な体験をもたらしてくれる幸福な瞬間の在処であったことが想像できるが故に、その突然の変容によって動揺する詩人の絶望と恐怖の描写は悲惨であり、シモンズの実生活におけるファム・ファタールとして、彼を翻弄しつづけた踊り子リディアの影は濃いだろう。そして、そのような女性との官能的な時間を持った後に、残酷に裏切られた男の絶望とは、世紀末の詩人にとって珍しい主題ではない。Ernest Dowson や Lionel Johnson など、デカダントと呼ばれた同時代の詩人達がむしろ好んで取り上げた主題のひとつとっていい。

シモンズに特徴的なのは、自分が接している現実世界において抱え込んだ様々な感情を語る際に、聖書や神話物語を積極的に重ね合わせる点である。この詩ではシモンズが抱える潜在的な罪の意識と、創世記における原罪のエピソードのイメージが、ひとつの夢の中で溶け合っているが、その

ことによって非常に個人的なエピソードに基づく奇怪な幻想にすぎなかった詩人シモンズの苦悩と絶望は、過去からくりかえし語り継がれてきた壮大な物語の一場面を読者とともに共有、再生し眺められているような普遍性を帯びるのである。それはシモンズが *The Symbolist Movement in Literature* の序文で記した、象徴主義が目指した効果のひとつでもあるだろう。「日常生活の様々な偶然の中に在って、男も女も自分たちだけが現実に触れていると想像するものだが、それらを払いのけると、人間性に、世界が生まれる前から始まっていたかもしれない、また世界が終わったあとにも存続するかもしれない人間性へのあらゆる要因に、より一層近づくことができるのだ」(5)。

そしてこの詩の最後に、シモンズはとうとう、その白昼夢のような幻覚から眼を覚まし、その視線は再び、ボードレルの詩集に挟まれていた赤い花卉に戻ってくる。それはシモンズの意識を突然めくるめくイメージの連鎖へと飛翔させた引き金となった始点でもあり、終着点でもある。この構造は、シモンズよりも後の世代のモダニスト達が小説において試みた手法、たとえば James Joyce が *Dubliners* (1914) において採用したエピソード、あるいは Virginia Woolf の *The Mark on the Wall* (1917) や Marcel Proust の *À la recherche du temps perdu* (1913–1927) における「意識の流れ」にも似ていないだろうか。プルーストの小説の第一部「スワン家の方へ」では、主人公が小さなマドレーヌを紅茶に浸して食べるという行為が、主人公の幼少時の記憶を呼び覚ます引き金となって用いられているが、それは意識の流れへと誘う始点としてのみ奉仕している。

ウルフの小説では主人公が一月のある日、ふと顔をあげた瞬間にちいさな壁のしみに気がつき、興味を覚えた瞬間から、自分をとりまく過去や現在、室内や室外、現在と死後といった関心へと意識が縦横無尽に行き交う想起の連鎖が続く。最終的に主人公の視線は、その壁のしみに戻っていき、その「正体」についての疑問が解かれることになっているのだが、意識の流れがスタートしたその始点へとまた回帰するまなざしの動線は、シモン



ズの“Hallucination: I”と同様である。*The Mark on the Wall*について Leaska は、知覚の様式について意識的だったウルフが「人間が自分をとりかこんでいる世界を知覚する際に、極めて個人的な彩色や感情的な重みが重要性をもつことを最初にとりあげた小説のひとつ」(151)と分析しているけれども、個人的な彩色や感情によって知覚されている世界の眺めは、その主観性故に、他人からみれば「幻覚」とよぶにふさわしい不可解さ、あるいは奇抜さを時にもっているものなのかもしれない。かくして、ウルフが *The Mark on the Wall* で試みた意識の流れを記述する手法は、他のモダニスト達と比較しても、シモンズの“Hallucination: I”と興味深い類似性を示している。

### 3. 新しい文学の仲介者であり実践者

ヴィクトリア朝世紀末の文筆家として理解されているシモンズの詩法と、先述の20世紀を代表するモダニスト達の間、とりわけ「意識の流れ」の手法について近似性が見いだされたが、文学上の影響関係において直接的な交流があったのだろうか。Steinberg がモダニズム文学における「意識の流れ」の系譜を辿る際に、まずシモンズの *The Symbolist Movement in Literature* からはじめることが最善の方法だろうと評価しているように(257)、シモンズの批評家としての眼が新しい文学の動向を敏感にとらえ、その著作を読んだ若い世代、とりわけアメリカのモダニスト達に影響をあたえていたことは少なくとも事実であろう。そしてその先見性、世紀末とモダニズムの間の仲介者としての貢献は、批評に限られていたわけではなく、文学界における新しい才能のスカウトとしても発揮されていた。ロンドンで本の出版を断られ続けていた若いジョイスの才能を早くから見だし、彼のデビュー作 *Chamber Music* (1907) の出版社 Elkin Mathews を説得したシモンズの手紙には、ジョイスの才能への確信からか、力強い言葉が並んでいる。「J. A. ジョイスと呼ばれているアイルランド人青年による作品です。(中略) こうして私が貴方をお願いしているように——もちろん私自身の提

案であって、ジョイス氏にたのまれたわけではありませんが——私が推しているジョイス氏のこの本が貴社より出版されたなら、詩を理解できる読者の誰もが関心をもつに違い在りません。こちらとしても *Athenaeum* か *Saturday Review* に書評を書くつもりですし、周囲にこの本のことを宣伝するつもりです。」(Nelson, *Mathews* 115)

プルーストに関しては、シモンズはごく短いエッセイを複数<sup>10</sup> かいており、興味深い記述も見受けられる。「プルーストを裸眼でものごとを観たりはしておらず、彼の視野とは曇った鏡のようで、その視界の奥には奇妙な像が輝いては消える。(中略)彼の小説のスタイルというのはスタンダールのような乾いた想像力とは異なっているのだ。色彩豊かで芳香をはなち、エキゾチックである。感情は複雑にからみあい、磨かれ、精妙な人生の花を咲かせるのだが、その花は戦慄を覚えるようなものかもしれない。熱情が毒を帯びるように」(Casuist 142-143)。この説明はシモンズが“Hallucination: I”に紡ぎだした「幻覚」のイメージを自ら解説してくれているようである。作家の想像力が可能にする、むせかえるような芳香と絶え間なく生成される色彩豊かなイメージは、生の魅力にあふれた美しい像を生み出すことができるのだが、それらはふとしたきっかけで戦慄をおぼえるような恐ろしい眺めも作り出せるのだということ。

シモンズとウルフの類似性は Karl Beckson をはじめ、一部の研究者も指摘していながら、二人の間に直接的なつながりの糸口を発見できずにいたが、1916年12月21日付の *Times Literary Supplement* にシモンズの *Figures of Several Centuries* について書いたウルフの Unsigned Review があることが判明している。

シモンズ氏は非常に優れた詩人です。その事実とは実際、氏の批評の特徴からも推察できることなのですが。この本に収録されている批評は概して短いのですが、そうして直接的に主題の核心部分に迫るべく意図されているからで、私たちがこれまで見逃してしまっていたような何かをその都度示してくれます。それは、詩人が主題をどうあつか

うべきかを理解しているように、常にそう行われているのです。延々と理論を並べ立てたり、知識を誇示することなく、でも簡潔に、率直に、そして余すところなく十分に。(623)

興味深いことに、シモンズの批評集について書いているこのレビューが、まずシモンズを *very distinguished poet* であるとはじめているところに、ウルフの「詩人シモンズ」への尊敬あるいは共感が認められる。シモンズの批評による具体的な説明、解説によって、新しい文学の可能性、夜明けを見いだしたモダニスト達は多かった。それゆえに *The Symbolist Movement in Literature* はシモンズの代表作となりえたのだろうから。しかし、おそらくウルフはシモンズの「詩」にこそ斬新さを、「これまで私たちが見逃してしまっていた何かを」見いだしているシモンズの先見性を認めていたのかもしれない。

#### おわりに

世紀末の詩人の私生活を彷彿とさせる雰囲気満ちた“Hallucination: I”は、日常における些細な瞬間、偶然開いた詩集の頁に見いだされた赤い花びらを起点として、個人の記憶と神話や聖書の主題が重なり合う象徴主義的な眺めを「意識の流れ」として溢れ出す奔流のように生成し展開する。そしてそれらがすべて、再び赤い花びらに回帰してゆく様は、記憶と幻想の溶液が、最終的に精製された一粒の結晶を獲得したかのようなようでもある。得られた結晶のイメージとしての「血のように赤い花びら」は、ある種の不変性を獲得したかのような静けさと同時に、また何度でもあのイメージの奔流となって流れ出す可能性をも示唆しているようである。日常の些細なきっかけで、またこの花びらを目にした詩人は、繰り返し同じ幻覚をみなければならぬのだろうか。それが強迫観念だと解釈されるのであれば、そこから狂気の発展へと結びつくこともあるのかもしれない、シモンズが1908年にそう診断されたように。しかし世紀転換期に書かれたこの詩に、1908年の狂気の予兆を積極的に見いだすよりは寧ろ、世紀末デカダンス、

象徴主義、モダニズムの要素を共存させることに成功したシモンズの詩法を評価し、「文芸批評」よりも効果的に新しい時代の幕開けを早めることができたのかもしれない「詩」の可能性を見いだしたい。

## 注

1 “Hallucination I”の初出については1895, 1897と諸説あるが、筆者が調査した限りでは、1901年とするのが妥当であろうと判断する。シモンズの代表的な選集のひとつ、*The Collected Works of Arthur Symons* (London: Martin Secker, 1924)あるいは現在最も入手しやすい*Selected Writings of Arthur Symons* (NY: Routledge, 2003)で同詩は*London Nights* (1895; 1897)の項に収録されていることから、この詩が1895～7年頃には既にかかれていたと理解してしまうのも無理のない話である。しかし実際に*London Nights*を参照すると初版、第二版、いずれにも“Hallucination I”は収録されていない。シモンズ研究者らによる包括的なシモンズ書誌*Arthur Symons: A Bibliography* (Greensboro: ELT Press, 1990)によると、*Poems by Arthur Symons* (London: William Heinemann, 1901)が“Hallucination I”の初出となっており、著者が確認したところ、実際に同詩が収録されている(118)。シモンズ自身が*Poems by Arthur Symons*序文において、「過去に出版された詩集の中から自分が保存したいものを収録するべく、追加や削除がされています。*London Nights*からは5つの詩を削除し、7つ追加しました」(vi)と明記しているように、1901年にこの序文を書いた時点では既に“Hallucination I”は書かれており、かつシモンズの意志で*London Nights*の詩のひとつとして1901年以降追加されるようになったと考えるのが妥当であろう。しかし一方で、*The Collected Works of Arthur Symons* (Martin Secker: London 1924)に収録されている“Hallucination I”は、*London Nights* (1897)の項に収録されながらも「1906年10月13日」と詩の最後に記されており、その根拠が不明瞭なままである。

2 一方で、1899年に出版された*The Symbolist Movement in Literature*の序文では、デカダンスを否定的に振り返っている態度の変化がみてとれる。(4)

3 「ボードレールの語る群衆の中に浴する美学、これは私の為につくられた言葉だ」とシモンズ自ら認めている。(London Aspects 19)「シモンズはボードレールのパリをロンドンに発見した最初の英国詩人であろう」(Stange 491)

4 後にシモンズの*The Symbolist Movement in Literature* (1899)を出版したWilliam Heinemannも、『イエロー・ブック』のJohn Laneも当時の状況を鑑みてデカダントの色彩の濃い*London Nights*の出版には難色を示したが、Leonard Smithersが出版を引き受けた(Nelson, *Publisher to Decadents* 58)。

5 シモンズは1893年のヴェルレーヌの英国滞在を世話し、ロンドンの宿として自室を提供したり、ヴェルレーヌもこの滞在を綴った詩を送る等、親密な交際があった。シモンズの*The Symbolist Movement in Literature*の“Paul Verlaine”でも、*Art Poétique*は引用されている(*Symbolist* 47)。

6 “Impressionistic Writing”を実践する者として、その手法について後に自ら説明している。「まず見ることに集中する、眼に映るものすべてを、それが唯一の仕事であるかのように。それから書く、選択された記憶のなかから取り出したら、それをひたすら書くこと、それが唯一の仕事であるかのように。」この言葉からも、自動記述の機械のように記録するのではなく、まず視界に映るものを選び好みせず貧欲に吸収したうえで、詩人の言葉として出力する際には「選択」の才が重要であると見なしていることが伺われる。（“Impressionistic” 343）

7 “A Prelude to Life”（1905）において、厳格だった父親についての描写とは対照的に、明るく優しい母については手放しの親愛の感情が直接的に記されている（*Spiritual* 13）。

8 シモンズはスペイン系ジプシーの血を引く踊り子のリディアが裕福な老人と結婚してシモンズの元を去った後も、生涯その影を引きずることになった。彼女との経験は“Bianca”等の詩にも数多く書いているが、シモンズ自身が回想しているものとしては“Lydia”が詳細である。

9 前川はこの詩について「早くも彼の発狂の予兆が読み取れる」（191）と分析し、その不気味な美しさを賞賛している。

10 “On Marcel Proust.” *The Café Royal and Other Essays*. London: Beaumont P, 1923 及び“A Casuist in Souls.” *Marcel Proust: An English Tribute* (1923)。後者は、ブルーストの死去に際し、コンラッドの呼びかけで実現した English Tribute 企画である。

#### 引用文献

- Anonymous. “Pah!” *Pall Mall Gazette*. 2 September, 1895: 4.
- Beckson, Karl. *Arthur Symons: A Life*. Oxford: Clarendon, 1987.
- ., et al. ed. *Arthur Symons: A Bibliography*. Greensboro: ELT P, 1990.
- Leaska, Mitchell A. ed. *The Virginia Woolf Reader*. Virginia Woolf. San Diego: Harcourt Brace, 1985.
- Ledger, Sally. “Wilde Women and the *Yellow Book*.” *English Literature in Transition*. 50: 1, 2007: 5–26.
- Nelson, James G. *Elkin Mathews: Publisher to Yeats, Joyce, Pound*. Madison: U of Wisconsin P, 1989.
- . *Publisher to the Decadents: Leonard Smithers in the Careers of Beardsley, Wilde, Dowson*. University Park, Pennsylvania: Pennsylvania State UP, 2000.
- Stange, G. Robert. “The Frightened Poets.” *The Victorian City: Images and Realities Vol. I*. Ed. Michael Wolff. London and Boston: Routledge, 1973.
- Steinberg, Erwin R. *The Stream of Consciousness and Beyond in Ulysses*. Pittsburgh: U of Pittsburgh P, 1973.
- Symons, Arthur. *Arthur Symons: Selected Letters: 1880–1935*. Ed. Karl Beckson and John M. Munro. Iowa City: U of Iowa P, 1989.

- . “A Casuist in Souls.” *Marcel Proust: An English Tribute*. Ed. C. K. Scott Moncrieff. Milton Keynes: Turtle Point P, 1923.
- . *The Collected Works of Arthur Symons Volume I: Poems*. London: Martin Secker, 1924.
- . “The Decadent Movement in Literature.” *Harper’s New Monthly Magazine*. 87. November 1893: 858–867.
- . “Impressionistic Writing.” *Dramatis Personae*. Indianapolis: Bobbs-Merrill, 1923.
- . *London: A Book of Aspects*. Minneapolis: Edmund D. Brooks, 1908.
- . *London Nights*. London: Leonard Smithers, 1895.
- . *London Nights*. London: Leonard Smithers, 1897.
- . “Lydia.” *The Memoir of Arthur Symons*. Ed. Karl Beckson. University Park and London: Pennsylvania State UP, 1977.
- . “On Marcel Proust.” *The Café Royal and Other Essays*. London: Beaumont P, 1923.
- . *Poems by Arthur Symons*. London: Heinemann, 1901.
- . “A Prelude to Life.” *Spiritual Adventures*. NY: AMS P, 1973.
- . *Selected Writings of Arthur Symons*. Ed. Roger Holdsworth. NY: Routledge, 2003.
- . “Stella Maris.” *The Yellow Book*. Volume I, April 1894: 129.
- . *The Symbolist Movement in Literature*. Ed. Richard Ellmann. NY: EP Dutton, 1958.
- Turner, Mark William. “Urban Encounters and Visual Play in the *Yellow Book*.” *Encounters in the Victorian Press*. London: Macmillan, 2005.
- Woolf, Virginia. *The Mark on the Wall*. Richmond: Hogarth P, 1919.
- . “Mr. Symons’s essays.” *TLS*. 21 Dec, 1916: 623.
- 前川祐一 『イギリスのデカダンス——網渡りの詩人たち』 晶文社 1995年。